

## ● 九州

### 西田 紘子

今年はいわゆる「ベーターヴェン生誕250周年で世界的に盛り上がるの  
だろう——2020年の年明けはそんな風に思っていた。だが、未  
来というのはこんなにも先の見えないものであったことを、身  
をもって知る一年となった。

2月中旬、日本でも新型コロナウイルスのアウトブレイク。  
3月に入ると九州地域でも演奏公演が続々と中止になり、4月  
以降も第22回別府アルゲリッチ音楽祭や第41回霧島国際音楽祭  
など名だたる音楽祭が延期された。文化・エンターテインメント  
を不要不急とみなす乱暴な声もあり、フリーランスをはじめ  
実演関係者は窮地に陥った。

この事態を受け、3月には全国的に無観客ライブ配信が行わ  
れるようになった。おのおのが居住地にしながら全国各地の公  
演を視聴することができ、リアルタイムで感想や解説がSNS等  
で展開されるという文化が成立する。クラシック界ではそれま  
でほぼみられなかった文化である。ただし、九州のクラシック  
系団体に限ると、無観客ライブ配信は3月の間はほとんど試み  
られていない。

コロナ禍という突発の事態は、こうして音楽体験の枠組みを  
変容させた。「そこに行かなければ聴くことができない」とい  
う場所性と強く結びついていた生演奏の聴取は、その条件を取  
っ払われることになった。

4月7日、国が福岡県などに緊急事態宣言を実施。これによ  
り「人が集う」という演奏活動の前提が成り立たなくなり、無観  
客ライブ配信さえほぼ不可能になった。そこで、テレパフォー  
マンスと呼ばれる新たな音楽活動が活発化していく。テレパフ  
ォーマンスは「音楽を何とか届けたい」「皆を元気づけたい」  
という有志の音楽家の試みとして始まった。個々の音楽家がひ  
とりあるいは少人数で、録音したものを合成・編集した演奏動  
画をSNS等に公開する。動画には音楽家の生活の様子が映り込  
むこともあり、かしまった本番とは異なり、音楽以外の要素  
にも共感が及ぶ。こうした動きを受け、しだいに音楽団体によ  
る公式発信も広まっていった。

例えば九響は、5月10日にYouTube上で「テレワーク合奏  
でお届けする応援歌〜いざゆけ若鷹軍団」を発表して注目を集  
めた。その視聴数は12月末時点で25,000回を超えている。6月  
中旬には福岡県ウェブサイト上で「医療従事者等の皆さまへ  
応援メッセージ動画配信」も公開した。音楽主幹の深澤功氏が「社  
会的に何ができるかについて模索した」と語るように（7月20  
日のインタビュー）、音楽文化に携わる者の多くが自身に何が  
できるかを問い直しつつ歩を進めた。

長崎OMURA室内合奏団は、4月から「うちコン」と題した  
遠隔アンサンブル・シリーズを通して、「おおむら音頭」「長崎  
は今日も雨だった」等のご当地ソングを継続的に届けている。  
また、同合奏団は、文化庁と芸協、全国27都道府県の文化芸  
術団体の連携による緊急プロジェクト「JAPAN LIVE YELL  
project」にも携わり、県内教育施設へのアウトリーチ活動を  
動画で生き生きと伝えている。

動画配信といっても形態や内容はこのようにさまざまであ  
る。注目されるのは演奏のアーカイブ性だ。例えば九響は、東

京公演が行われるはずだった3月14日、福岡のインターネット  
TV局カウテレビジョンと連携して、小泉和裕音楽監督の指揮  
によるマーラー「交響曲第3番」第1楽章の映像を公開した。  
これは、2019年7月27日に行われた第375回定期演奏会の録画  
の一部である。過去の名演が全国や世界の人々へ届けられるよ  
うになったのだ（12月末時点で視聴数は12,500回を超えてい  
る）。音楽団体が有する潜在的資産が、今後も有効に活用され  
ていくことが望まれる。

ライブ配信もアーカイブされるようになった。これまで生演  
奏を再び聴きたいと思っても、手段はTVやCD、その他の音源  
配信によることが多く、生演奏とメディア公開との間に時間的  
距離があった。しかし例えば、4月から精力的にSNS上でライ  
ブ配信を展開した弦楽器工房まつもとと主催の演奏は、直後から  
現在に至るまで視聴可能である。弦楽器工房まつもとは、当初  
から配信に際して一口500円の支援窓口を設けた点でも先進的  
であった。

配信の技術的レベルは日進月歩で向上している。最初のう  
ちは無料配信が多かったが、コロナ禍が長引くことが予見される  
今、配信やアーカイブの有料化による一定の収益確保が課題で  
ある。現在、響ホール室内合奏団（11月の第36回定期演奏会）  
や長崎OMURA室内合奏団（12月の第30回大村定期演奏会）な  
どが、会場の演奏を有料配信するという試み、いわゆるハイ  
ブリッド公演を展開している。

これらの活動に伴い、日本では定着しづらかった寄附という  
行為も一気に広まった。九響では4月中旬に一口の額が1,000  
円に引き下げられ、寄附制度が身近なものへと変容した。楽団  
には10月末時点で25,900,000円を超える支援が寄せられている。

本格的な公演再開は7月からであった。相次ぐ公演中止やプ  
ログラム・出演者の変更、それらによる財政・運営・広報の困  
難、会場（ロビー、客席、舞台）や練習時における感染症対策  
をはじめ、ホールや主催者等のマネジメント・スタッフが直面  
した課題は膨大である。主催者と会場、自治体がこれまで以上  
に連携を必要とされる年となった。現場の声は日本音楽芸術マ  
ネジメント学会第12回夏の研究会シンポジウムなどを通して部  
分的に共有されているが、それらからは、感染状況や地域環境  
によって対処法が大きく異なることが窺える。

例えば大分はどうか。iichiko総合文化センター企画担当・八  
坂千景氏によれば（12月26日のインタビュー）、3月以降は公  
演中止による払い戻し手続き等でスピード感ある対応が求めら  
れたという。6月に入ると、公演再開を見据えてスタッフに研  
修を行い、来場者向け動画を制作するなど、皆が各自でできる  
ことを模索した。それが実を結んだのが、7月に音の泉ホール  
で行われた財団友の会びび有料会員限定の無料コンサート「び  
びニュースタイルコンサート」である（財団が管理運営するジ  
ュニアオケの指導者による5日の室内楽公演と、大分出身の気  
鋭、渡邊智道・水谷晃・宇野健太、そしてTAIRIKが登場した  
24日の公演）。後者の公演がきっかけとなり、来年度は「若手  
音楽家インレジデンス」という新たな音楽プロジェクトが始動  
するという。苦境にあって「生の公演」がもつ力が改めて実感  
される。

iichikoグランシアタでは10月24日に、共同制作事業であるプ  
ッチーニのオペラ「トゥーランドット」公演が催された。出演  
者は各地での公演ごとにPCR検査を受けたという。本年、九州  
では第九公演が軒並み中止となったが、今後、オペラや合唱作  
品を上演していくためには、こうした検査制度の整備を検討し  
なければならぬだろう。